

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4071700555		
法人名	有限会社 王子苑		
事業所名	グループホーム 王子苑		
所在地	〒822-0001 福岡県直方市感田1040番地4		0949-26-4245
自己評価作成日	平成23年8月21日	評価結果確定日	平成23年09月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

“生涯自分の足で歩こう”という苑長の方針のもとに日々の筋トレ、特に下肢筋力の強化に力を入れている。毎日の散歩は、もとより歩行器を利用して起立運動、足あげ運動を個々の能力に合わせて行う。特に退院した利用者には、集中的にリハビリを行い、体力回復をはかるなど苑長の指導のもとスタッフ総力をあげて効果をあげている。脳トレや日記を書いたり、計算をしたり、楽しみながら実行している。恒例の秋の職員一泊旅行は、体力の許す限り、参加出来る方もお連れして、みんなで楽しんでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

自然環境に恵まれた見晴らしの良い住宅地の中に、グループホーム王子苑がある。広がりピングの真ん中に、大木を配置し、利用者の居室は畳敷きもあり、家庭的な雰囲気が漂っている。苑長は、「生涯自分の足で歩こう」という利用者に対する思いを、職員に理解してもらい、四季を通して職員との散歩や、滑車を使ったりハビリと合わせ、身体機能維持向上に努めている。ホームは自治会に加入し、行事参加や、町内パトロール、お助け隊による、独居老人宅の訪問等、活発な交流で、地域住民と、信頼関係が始まっている。運営推進会議委員からの意見や要望は、活発に出され、ホーム運営に反映されている。また、家族会を年2回開催し、家族同士で歓談する場を設け、利用者や家族の本音を聴きだし、心の交流を図りながら、信頼の絆を構築しているグループホーム 王子苑である。

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kohyo.fkk.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5-27		093-582-0294
訪問調査日	平成 23年09月14日		

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を 掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求 めていることをよく聴いており、信頼関係ができてい る (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場があ る (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域 の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係 者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理 解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きした表 情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足 していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく 過ごしている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにお おむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な 支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

(セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	1	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝ミーティングの時に、理念をスタッフ一同声を出して言い、新たな気持ちで1日を送る。	職員は、ミーティング時に、ホーム独自の理念を唱和し、理解して、実践に向けた取り組みをしている。また、日々新たな気持ちで介護サービスを行うために、常に理念に立ち返り、意識しながら理念の実践に繋げている。	
2	2	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に入っている。ゴミ出し当番など順番がまわって来て利用者と一緒に片付けたりする。近所が留守の時など見守りを頼まれたり、庭木の剪定、駐車場の提供などの交流あり	自治会のゴミ出し当番や、駐車場の提供、ホームの焼き肉パーティーには、近所の人に参加したり、日常的な近所づきあいが実現している。また、様々なボランティアの方が来訪し、日々の暮らしを充実したものにしている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	電話相談に応じたり、地域のボランティア、民生委員と連絡をとり合って支援している。管理者が自治会の“おたすけ隊”に入り独居老人の支援をしている		
4	3	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員会は23度ほど開いたが、その際外部評価の報告をし、改善点なども示したり、民生委員との連携で情報をキャッチして入居となった人もいる。	会議は2か月に1回開催され、家族、地域の方、区長、行政職員がメンバーである。ホームの現況、予定、目標などを報告し、参加者からも活発な意見が出され、ホームの発展に繋がる会議となっている。	
5	4	市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	認定申し込み時などに役所に行き入所についての話や、包括のケアマネに通所施設を紹介したり、来苑した相談者の情報などを市に報告している。又役所開催の説明会、懇談会などに参加して意見交換している。	運営推進会議に行政職員が参加したり、ホームからは、行政担当窓口で相談や報告に行き、積極的な情報交換を行っている。	
6	5	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の事例はなく、スタッフの身体拘束に関する正しい認識については苑長や主任からシュミレーションを実施しての説明などによって正しく理解するように取り組んでいる。マニュアルもある。	身体拘束廃止マニュアルを用意し、勉強会を通して身体拘束による弊害を職員全員が理解し、利用者一人ひとりが生き生きと暮らすための支援をしている。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者が高齢者虐待防止のマニュアルを作り、当苑にとって現実に起こりうる可能性などの事例をあげ勉強会を開いている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
8	6	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員が地域福祉権利擁護事業や成年後見制度の研修を受け他の職員に報告をしている。家族の中には裁判所まで行きより詳しく説明をうけた人もいたが複雑すぎて止めたと報告した人もいた	権利擁護に関する制度についての、研修会に職員が交代で参加し、制度に対しての理解を深め、利用者や家族が制度を必要とする時、いつでも説明し、活用までの支援体制がある。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に説明し理解してもらっている。入所時には他の施設の見学を勧めて納得して入ってもらい退所時は不安のない様に他の施設を紹介している。			
10	7	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者にはケアプランをたてる時や日頃の話しの中から気持ちをくみ取ったり家族は来苑時、家族会(年2回)などから意見要望を聴き運営に反映している	利用者との日常の会話や、家族の来苑時に話をする機会を持つなど、利用者、家族の心の中に溶け込み、意見や思いを把握するように努めている。また、年2回家族会を開催し、広く要望を聞きだす努力をしている。		
11	8	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1度の定例会を通じ職員との意見交換をして運営に反映している	定期的に会議を開催し、職員がのびのびと意見を出せる雰囲気作りに努め、活発な討議を行い、意見の反映を、運営に実践する取り組みがある。		
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の就業状況を把握して資格、役職手当等を付けたり賞与で差をつけたり、努力ややりがいを惹起している			
13	9	人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	性別、年齢を理由に排除はしない。向上心のある職員は看護学校進学を勧めたり、色々な国家資格を取れるように応援している。勤務終了後、夜、有志の職員が集まり趣味や国家試験に向け勉強をする場を提供し応援している。	職員の採用は、やる気と介護に対する思いを重要視し、年齢、性別の制限はない。また、職員の休憩時間を確保、資格取得への支援など、職員が生き生きと働ける職場環境を目指している。		
14	10	人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	人権の研修を職員が受け年1度の定例会の勉強のテーマとして教育、啓発に取り組んでいる。	代表は、利用者の人権を尊重するという点について、内部の研修時に職員にしっかりと伝え、全職員は繰り返し学ぶことで理解し、日々のケアで実践している。また、外部の研修に参加し、啓発活動に繋げている。		
15		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外、各種の研修を職員交替で受けている。介護、看護の特技、薬の知識などは管理者から適宜指導がある。職員は全員参加としホーム内での会議録、資料もある。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他のグループホームの見学や特別養護老人ホームなどで研修をさせてもらったりはした。他のグループホームのケアマネージャーと交流し、お互いに相談したりしてサービスに生かしている。又、満室の場合は他のグループホームや小規模多機能施設を紹介している。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	インテーク面接を重視して本人の要望や不安をよく聴き安心して暮らせるように努めている。		
18		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	苑長、副苑長、主任をはじめ、家族と多くの時間を取り家族の悩みに寄り添って理解し、苑を信頼して頂ける様努力している。		
19		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメントで課題を見極めケアプランを立てて支援の順番を見極めている。		
20		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者を先生としてスタッフが着付け、園芸、裁縫などを教えてもらって、信頼関係を築いている。又、信仰深い利用者には“人生訓”などを勉強させてもらっている。		
21		本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ケアプランに本人、家族の意向を積極的に取り入れている。病院受診、散歩、外出支援などに協力してもらっている。利用者との会話の中で家族の話を行い、自宅の住所、子供、嫁の名前など忘れない様に支援している。		
22	11	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	スタッフ同伴で自宅へ仏様参りや自宅の様子を見に行く事、利用者の知人が面会に来やすい様に家族などに協力してもらっている。	友人、知人が利用者を訪ねてみえたり、電話を掛け合ったり、関係継続の支援を行っている。また、利用者が行きたいところ、馴染みの場所など、家族と相談しながら支援している。	
23		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	比較的しっかりした利用者を中心に洗濯物たたみ、掃除、茶碗洗い、他の利用者のズボンの裾あげをしてもらったりなど利用者同志で関わってくれて、認知度のレベルの低い人にも理解してくれているので、結構自然に付き合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	誠意をもって他の施設の紹介をしその後面会や見舞いを定期的に行う家族や利用者には大変喜ばれ感謝されている。退所後に家族の訪問も有り付き合いを大切にしている		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	趣味の短歌の投稿、美容院、自宅の様子を見に行く。行きたい所の外出などは本人の希望で支援している。本人の好きそうなCDを流したりしている。	職員は、利用者に寄り添い、日々の暮らしの中で思いや意向を丁寧に聞き出し、出来るだけその思いを実現できるよう、職員間で検討し、家族と協力しながら取り組んでいる。	
26		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	今まで使用していた布団、鏡など小物類を居室へ持ち込み生活している。今までの馴染みの関係を断ち切らない様、通いの医院、美容院は継続して支援している。		
27		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている			
28	13	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の意見や要望を取り入れて介護計画を作成している。職員にモニタリングをしてもらい介護者の気づきを大切にしてプランの参考としている。	利用者、家族の意見、希望を聴き取り、職員の気づきを出し合い、関係者で協議し、介護計画を作成している。見直しは3カ月毎に行っているが、利用者の状態に変化があった場合は、その都度対応している。	
29		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	苑固有の物を作って個別の記録記入し、スタッフも共有し介護の実践や見直しに活かしている。		
30		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の要望に答えて買い物に行ったりケーキやコーヒーを食べに行ったりとなるべく一人ひとりの希望に答えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	花壇の手入れ、工作、一部の利用者の希望により硬筆などの指導にボランティアが定期的に来て支援してくれている。		
32	14	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は本人、家族の希望を大切に支援している。その際の情報を共有し病変などに往診等で迅速に対応してもらっている。	全員が希望のかかりつけ医を受診できるよう、提携医による往診や、家族と協力しながら受診の支援をしている。また、職員の中に3名の看護師がいて、24時間安心して過ごせる健康管理体制を確立させている。	
33		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	正看1名准看2名薬剤師1名を職員として配備し、かかりつけ医の医師も快く往診してもらったりして医療連携は充実している。		
34		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	早期退院に向け病院の看護師、医師、ケアマネを交えて相談をする		
35	15	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期はかかりつけ医や家族の意見を聞き、家族の協力もスタッフの支援力の1つとして納得してもらい出来る限りの支援するつもりである。又、そのマニュアルもある。	ホームで出来ること、出来ないことを、利用者や家族に説明し、利用者の重度化に向けた支援体制を確立させる努力をしている。また、看取りについての指針を作成し、利用者の暮らしを守る支援体制がある。	
36		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	誤嚥、転倒などの応急手当などは苑長(看護師)の指導あり又、消防署の救命講習も受けている。		
37	16	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中、夜間、火災時の避難訓練は年2回消防署指導のもとで行っている。地域の方々が避難場所として自宅を開放して頂けるとの申し出もある。非常食や毛布の準備あり	昼夜を想定した避難訓練を、地域住民の協力を得て、年2回実施している。非常災害時に備え、非常食、飲料水、毛布の準備をしている。また、近隣住民の協力の約束も取り付けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉づかいや対応には人格を尊重し利用者さんに接している。トイレや入浴、居室訪問時のプライバシーにも配慮している。	職員は、利用者を人生の先輩として敬愛し、優しい言葉かけやプライドを傷つけないよう配慮した対応で、利用者の暮らしが楽しいものになるよう支援している。	
39		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ケアプランをたてる時には個人の思いや希望を聞いたりする。又食事の内容にも好み、希望を取り入れる。		
40		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝の体操の時間に1人1人に今日は何がしたいかを聞き、外に出る事が好きな利用者や何もしたくない利用者、自室で新聞を読んだり等の希望に沿って実現に向けて努力している。		
41		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日同じ物を着るのではなく自分で選べる人、そうでない人でも職員の支援で着替えを楽しんでいる。又朝は整髪を支援している。		
42	18	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の好み、食べたい物を聞いて献立を立てている。又食事の時は毎回準備や片付けの手伝いもしてもらう	利用者の食べたいものを専門の調理員が愛情たっぷりで作っている。午前中からまな板をたたく包丁の刻みの音や、ごま油の香ばしい香りに食欲はそそられ、利用者は、台拭きや配膳など、てきぱきと動き、職員と一緒に囲む食卓は、賑やかな会話と笑い声が溢れている。	
43		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日1500キロカロリーを目標とし、水分は計量カップで計るなど徹底している。1日の水分量は1リットル以上(汁物は除く)を目標にレベルの低い人には飲水の介助をする。食事や水分の摂取量は記録を行っている。		
44		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアのチェックをし、夜間は義歯を預かる。歯科については必要があれば往診をしてもらう。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	19	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各利用者ごとに排尿パターンを把握しトイレ誘導を行っている。夜間は1名のみオムツを使用するが他利用者はトイレやPトイレで排泄する。	職員は、利用者の排泄パターンをチェックシートで把握し、細やかに声かけ、誘導を行い、日中は全員おむつを使用せず、失敗を恐れずに、排泄の自立支援に向けた取り組みを行っている。	
46		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	腹部マッサージを行ったり、水分量の確認をしたり服薬の調整や医師の診察を行うなどの対応をする。		
47	20	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回の入浴では入浴の順番を決め、1番風呂に平等に入れるように工夫している。	入浴は、利用者の希望に合わせ、順番を取り決め、週3回は入っているが、利用者の状況や要望によって、毎日入ることも可能である。	
48		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間眠れない利用者がいれば、和室でテレビを見たり、話したりして落ち着くまで対応する。		
49		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師の指示通りはもちろんの事だが、副作用の発現と可能性は十分把握して変化があるとすぐ中止し、医師に報告し指示をあおいでいる。		
50		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	短歌をたしなむ利用者が同人誌に出展したり、有志で硬筆の練習したり、今までやっていたことを継続できるよう支援したりしている。自分で新聞を取ったり、他の利用者の縫い物をしたりする利用者もいる。		
51	21	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	年1回外出可能な利用者を連れスタッフの慰安旅行も兼ねて一泊温泉旅行に行ったり以前利用者希望のNHK大河ドラマ篤姫ゆかりの地鹿兒島、利用者の古里(宇佐町、久住町)に行ったりした。	「生涯、自分の足で歩こう」を合言葉に、日常的に一人ずつ順番に散歩を行い、外気を肌で感じることで心身機能の維持向上に努めている。また、一泊旅行などを計画し、思い出に残る楽しいひと時を提供している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物に行ったり、診察での支払いは本人が窓口で出来る様支援している。		
53		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族より手紙など来た際は、本人様に渡し、お礼として電話をかけ本人様が、かわりお話される。又、携帯電話を持っている利用者には相手の番号の設定や充電の支援をしたり又、手紙を書く利用者には投函の支援をしたりしている。		
54	2 2	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建築に詳しい苑長が日光が程よく入る様に苑を設計している。急な模様替えは避け、徐々に季節感を考え夏などには苑で取れた野菜なども飾る。	「今日一日をたのしく笑う」と書かれた書が掲げられたリビングの中央に巨木を配置し、放射状に広がる建物は、広々として、温かみがあり、掘りごたつのある和室と共に、利用者が居心地良く過ごせる空間である。和室には、「福智山 高取山の見える王子苑で 達者で暮らしたい」と利用者が書いた書が飾ってある。	
55		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ほぼ居間で過ごしているが、和室や少し離れた所に利用者が利用しやすい様にソファや椅子などを置いている。椅子は数多くあり自由にすわれる。		
56	2 3	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	個人の持ち物を、家族や自分が買い揃えて持ち込んでいる。馴染みのダンス、読みなれた本、家族写真、子供の絵など	畳とフローリングの居室があり、落ち着いた家庭的な雰囲気である。家族と相談しながら利用者の馴染みの物を持ち込んでもらい、穏やかな気持ちで暮らせるよう支援している。	
57		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すり等有り。バリアフリー、照明、水道が自動センサー付きで切り忘れが無い。又、トイレ、風呂など分かりやすく表示し混乱を防ぐ。		